《批評》

# ひめやかな奇跡――キプリングのいくつかの短編に触発されて

松本　潤一郎　MATSUMOTO , Jun-ichiro

The crucial thought in all of this that such failures/defense formations persist as a peculiar sort of stress in the individual and collective lives of those in some way linked to them. It is the signs/symptoms of such stress that await, as it were, the 'miraculous' now of their recognizability. Eric Santner, “Miracles happen.”

## はじめる

ここでわたしはイギリスの作家ジョゼフ・ラドヤード・キプリング（1865-1936）の三つの短編から、ひとつの「文学機械」（ドゥルーズ／ガタリ）を（再）構成し、小説的思考のひとつのありかたをかんがえてみたい。

キプリングの作品はきわめて難解である。以下によまれる小文はキプリング研究などではまったくない。ただ彼の遺したテキストのほんのいくつかに、わたしがおぼつかずがみついた、その消えゆく痕跡のひとつであるにすぎない。わたしは致命的な誤読、誤解をこじらせているかもしれない。

小説的思考はわたしたちに、あるひめやかな奇跡をしめしてくれることがある。ときにその思考はわたしたちに、生きる力とこの世界への希望をつつましやかにあたえる。

拙稿をよんでくださろうとしているかたがたへ。この奇跡をあなたの身体において、文字どおりふかくつよくかんじとっていただくために、もしあなたがキプリングの「祈願の御堂」「園丁」「『無線』」をよんだことがなかったなら、それらをよんでいただいたあとで、以下の議論をよんでくださることを、せつにおねがいいたします。

## ふりむく

ある女性が、戦死した甥の墓まいりにゆく――ひとことでいえば、キプリングの「園丁」は、ただそれだけの話である。[1]

物語の末尾、戦没者を弔うハーゲンゼーレ第三墓地に到着した女性へレン・タレルは、甥マイケル・タレル中尉の墓標の場所を、墓地を管理する園丁の男におしえてもらう。

男がひとり一列に並ぶ墓石の背後で跪いていた――明らかに園丁と思われたが、そのわけは、彼が柔らかい地面に若木をしっかり植え付けていたからである。手に書き付けた紙を持って彼女は近づいた。彼女がやって来るのを見て男は立ち上がり、前置きも挨拶もなく尋ねた。「どなたをお捜しですかのう」

「マイケル・タレル中尉です――わたしの甥ですわ」とヘレンは、生涯ずっと幾度となくそうしてきたように、ゆっくりと一語ずつ言った。

その男は視線を上げ、無限の同情をこめて彼女を見やったあと、播種された芝生から、立ち並ぶ黒い十字架の裸木のほうに視線を移した。

「わたしと一緒に来なさい」と彼は言った。「そうすれば、あなたの息子さんのいる処を教えてあげよう」

共同墓地を離れるとき、彼女はこれで見納めと振り向いた。遠くの方で例の男が、若木の上に身を屈めているのが見えた。彼は園丁なのだわと彼女は考えた。（傍点すべて引用者）

最後の文に現れる「園丁」の一語に日本語版訳者は註を付し、『ヨハネ伝』(20-15)の参照をうながしている。

最後の二つのパラグラフのあいだにおかれた余白と、傍点をほどこした「息子」に注意をとどめつつ、手もとの新共同訳『新約聖書』より「ヨハネによる福音書」該当箇所をみると、そこはマグダラのマリアが、復活したイエスを目にする場面である。

イエスの墓の外で泣いていたマリアがふりむくとイエスが立っている。マリアははじめそれがイエスだときづかない。「婦人よ、なぜ泣いているのですか、どなたを捜しているのですか」とイエスにたずねられ、彼を園丁だとおもったマリアは、「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしがあの方を引きとります」と答える。同伝(20-16)で、マリアはイエスにその名を呼ばれ、園丁はイエスであるときづき、ふたたびふりむいて「先生」とよぶ。

以上をふまえ、ハーゲンゼーレ第三墓地にもどろう。この園丁は、復活したマイケル・タレル中尉なのか。それも、ヘレン・タレルの甥ではなく、息子としての？

だとすれば、しかし、彼女はなぜひとりで墓地からもどってゆくのか？あるいはそれは、彼女の死を、昇天を意味するのか――「共同墓地を離れるとき、彼女はこれで見納めと振り向いた」――。

たしかなことはいえない。ただ、婦人のふりむくみぶりがテキストにはっきりしるされている。それだけはたしかである。

ある女性が戦死した甥の墓まいりにゆく。ただそれだけの物語が、にもかかわらず、わたしたちに驚嘆の念をいだかせる。

このなにげなくおかれたふりむくみぶりが、さりげなくなされる「甥」から「息子」への変換とともに、ある奇跡を起こしているからである。それはテキストのなかにかきこまれた、甥=息子の〈復活〉という奇跡である。このテキストをはなれては存在せず、しかしテキストのなかのどこでもあかされることのない、ただ「ふりむく」というみぶりだけがはっする、ひめやかな奇跡である。

この奇跡は、なんとつつましく、ひかえめに配されているのだろう。「マイケル・タレル中尉です――わたしの甥ですわ」と園丁にこたえるヘレ

ンの口調は、「生涯ずっと幾度となくそうしてきたように、ゆっくりと一語ずつ」言葉を口にする人物のそれであり、またヘレンの性格をしめす描写、とりわけ甥の死を知って、「あらゆる感情に終止符が打たれ」、「これでよいのだと全てを容認し」たヘレンが、「彼女の世界［を］停止」させ、「停止の衝撃を真向から受け」たようすが、物語末尾でほとんどきづかれぬまま、ひめやかにおこる「奇跡」を、準備する。

ヘレンの弟ジョージ・タレルが、インドで退役下士官の娘とのあいだに息子（マイケル）をもうけながらも落馬して死んでしまった事情にふれる箇所でも、語り手は、「これらすべての詳細は、土地のみんなの共有となっていた。というのは、ヘレンは真っ昼間のごとく明けっ放しで、醜聞はもみ消そうとやっきになればなるほどひどくなるというのが彼女の持論だったからである」というふうに、いっさいをうけいれる彼女の性格を、描写している。

こうした彼女のあけっぴろげな、ゆえにある諦念にみたされた性格は、ハーゲンゼーレに墓まいりにむかう旅のとちゅう、彼女が知りあったスカーズウァース夫人との対照において、奇跡の効果をさらに劇的にしている。

友人に依託されて墓地にきたというスカーズウァース夫人は、じつは依託を口実として、過去に関係をもっていたことを世間に永遠に知られてはならないある男性の墓まいりにきていたのであり、旅のとおりすがりに知りあったヘレンにだけ、「嘘にひどく疲れてしまったんだもの――」と、夫人はその心中をうちあける。

夫人みずからによる秘密の暴露は、なにもかくされてはいないにもかかわらず、たいへんつつましげなひとつの秘密のようにして、ヘレンにひめやかな奇跡が起きたこととつりあっている。そして、奇跡がほかでもないヘレンそのひとにおとずれることを、真実／虚偽の対照をとおして、語り手は読者につよく納得させる。たいせつなのは奇跡そのものだけではない。それが知覚しがたいほどかすかなしかたで起こるということである。そして、さりげないだけにいっそう効果的な奇跡を生む、文学機械（テキスト）の動作配列（アレンジメント）である。

「衝撃」的な「停止」との対照において、「ふりむく」というみぶりー運動が、すべてを受容したひとつの精神、あたかも霊的自動機械（オートマトン）に還元されてしまったかのような彼女の精神に、あるひめやかな奇跡をもたらすのである。すべてを知覚し、受け容れる精神はひとつの自動的な機械と化し、外部から偶発的 *accidental* に生じる事象に触発されるたびに、身体はおのれの属性 *accident* を、可塑的に変形させる。

ヘレンの精神がいっさいを受容する機械と化したとき、「甥」から「息子」への親族構造内の移動すなわち属性の変化は、すでに準備されていたといえるだろう。「どなたをお捜しですか」という問いに、ヘレンが「わたしの甥ですわ」と答えたにもかかわらず、園丁は「あなたの息子さんのいる処を教えてあげよう」と応じる。

ここには二人の会話（コミュニケーション）に聞きちがい（アクシデント）が生じた可能性、誤聴（ノイズ）または誤作動（きちがい）が奇跡（コレスポンダンス）を起こした可能性がある。誤聴したのが園丁とヘレン、いずれなのかを、識別することはできない。

二人はひとつの交流回路（メディウム）を構成し、それを短絡（ショートサーキット）させることによって、奇跡をテキスト内に生産した。すなわち、聴覚という属性を交換しあい、二つの耳の領土化と脱領土化と再領土化がどうじに進行するめまいのような過程のなかで、第三の耳（あらたな知覚）とともに、一つの錯乱ー出来事（甥＝息子）を、しかし、ひめやかに、産みだしたのである。

**いれかわる**

二人の老女が対話をかわすだけの「祈願の御堂」でも、奇跡はたいへんつつましくおとずれる。[9]

「バベルの図書館」の館長（ボルヘス）が、序文で指摘するとおり、「二人はともになかなか謙虚なので、驚きをあらわには示さない。日常のことを受け入れるのと同じ諦めたような様子で信じがたいことを受け入れるのである」。

物語は、入院中のミセス・アシュクロフト――「園丁」のヘレン同様、「彼女は決して急ぐということのない人だった」（これが「祈願の御堂」の奇跡をひめやかにする効果のひとつである）――を、友人のミセス・フェットレイがおみまいするところから、はじまる。

「窓辺の長椅子に陣取った」ミセス・フェットレイは、「キルト・パッチの嚢を手に」、「キルトの小切れを好みに合わせてあれこれ組み合わせ」ながら、ミセス・アシュクロフトは、「藺草の茎で編んだ道具籠の縁取りに麻布の裏打ちを縫いつける針の手を動かしつづけ」ながら、うららかな春の午後を、かつての恋愛のおもいでをかたりあって、すごしている。

物語の主線は、一見してミセス・アシュクロフトの人生だが、どうやらミセス・フェットレイにも、「園丁」のスカーズウァース夫人と同様、おおやけにはできない恋に落ちた過去が、あるらしい。

ミセス・フェットレイはしばらくの間よどみなく非常に正確に話しつづけ、話し終わって目頭を拭った。「それでね」と彼女は締めくくりをつける、「あの人の死亡記事を先月の新聞から読み聞かされたのよ。もちろんそれはもうわたしの関心を引きはしなかったわ――もう長いことあの人とは会ってもいなかったし。もちろんわたしとしても言うこともなかったし、お見せするようなものも何もなかったわ。それに、イーストボーンにあの人のお墓を見に行くちゃんとした理由もないわけよ。いつかこっそりバスで行ってみようと思ってたの。でも、昔の苦労のことをなにかと聞かれそうだし、だからそのことはすっかり忘れることにしてたの」

いっぽう、愛する男性が病にかかったと知ったミセス・アシュクロフトは、かつて雑役婦の娘ソフィーがおしえてくれた「祈願の御堂」にゆき、男をすくおうとする。

ソフィーによると、「祈願の御堂で叶えられるのは、誰か他のひとの悩みごとだけ」であり、「ワドロウ・ロードにあ」る、「あんまり長いこと空き家のままになっていて、誰か住むひとが現われるのを待っているどこかの家」にゆき、「ベルを鳴らし、郵便差入れ口の細いスリットから祈願したいことを言えばいいんですって」。

そうすれば、「人の臨終のさいに現れる、死者の、あるいはもっと悪い場合には生者の、生霊」であるという祈願の御堂にひそむ「遊魂」が、身体的または精神的なその「悩みごと」をとりのぞき、それを祈願者の身体または精神にうつしかえ、苦痛をこうむらせるのだという。はたして彼女はその家にゆき――

郵便受のスリットから、「お願いです、わたしの色男、ハリー・モックラーに取り憑いている厄病をぜんぶ身代わりにわたしに移してください」って中に声をかけたの。すると、ドアの向こうにいるなんだか得体の知れないものが、もっとよく聞こうとしてドアにじっと手をかけていたみたいに、なにやらふーっと息を吐いたような気

配がしたの。

こうしてハリーは恢復し、私は足に悪性の腫瘍を負うことになったのよと、ミセス・アシュクロフトは友人にはなしてきかせる。「郵便受のスリット」への言及は、郵便制度という近代的コミュニケーション媒体（メディウム）を示唆しており、この媒体を介して遊魂が霊媒（メディウム）作用を発揮するというのも、うなずけるところである。

ヘレンと園丁のあいだに起きたのと同様の属性の交換が、ここにはみいだされる。ただし、身体または精神的苦痛をもふくめた交換が、ここでの主題である。ミセス・アシュクロフトは、愛のためにいかなる苦痛をも受けいれる女性であり、この点でも、ヘレンと共通する。だが「痛み」は、それにふさわしい「報い」（交換）を、要求する。二人の老女の対話をきいてみる。

ミセス・フェットレイはしばらく考えてから、きっぱりと兜を脱いで降参した。

「いまから数えてあなたあとどのくらい生きられると踏んでるの？」

「ゆっくりきたものはゆっくり去るのよ。でも、この次のホップ摘みでもしあなたにお会いできなければ、これが最後のお別れね、リズ」

「そのときまでになんとかやっていけるかどうかわからないわ――わたしを導いてくれる犬がいなくては。子供たちはといえば、面倒なことはいやでしょうし、それに――ああ、グレイ――わたし目が見えない、目が見えない！」

「まあ、それであなたこんなにいつまでもキルトの縫い刺しの指が進まなかったのね！ さっきからどうしてかしらと思ってたんだけど……でも痛いことが大事なのよね、そう思わない、リズ？ 痛いことが大事なのよ、ハリーをつなぎとめておくためには――彼にいてもらいたいところに。痛みが無駄に費やされてはならないわ」

「それはそうよ、確かにそう思うわ、あなた。あなたあんなに尽くしたんだもの、それにふさわしく報われなくっちゃ」

「わたしのはただひとつ――もしかこの痛みがちゃんとわかってもらえたら、ってことだけよ」

「それはきっとわかってもらえるわ、きっとね、グレイ」

ここで眼がみえないとのべているのは、ミセス・フェットレイである。そして物語の末尾では――

「たぶんおしゃべりしすぎたかもね」とミセス・フェットレイは言って立ち上がった。「それじゃここらへんでそろそろ退散しようかしら」

「でもまずそれを見てちょうだい」とミセス・アシュクロフトは弱々しげに言った。「あなたにそれを見て欲しいの」

ミセス・フェットレイはそれに目をやって、身震いした。それから身をかがめてミセス・アシュクロフトの蝋のような黄色い額にキスをひとつし、さらに、視力の失せかけた灰色の目にもキスをした。

「大事なことよ、そうでしょ、痛みがあるということは？」いまでもまだ昔の面影を残している形のよいその唇からもれた息は、もはや言葉にならなかった。

ミセス・フェットレイはその唇にキスし、ドアのほうへ去っていった。（傍点すべて引用者）

「それ」とはなにか。明示されてはいないが、おそらく、ミセス・アシュクロフトの足のきずあとである。それをみて「身震い」したミセス・フェットレイは、ミセス・アシュクロフトの「視力の失せかけた灰色の目にも」、接吻する。盲目という「痛み」を、ミセス・アシュクロフトは、祈願の御堂にゆくことなく、老いた友のためにひきうけ、こうむったのである。

あるいはむしろ、病院の一室それじたいが御堂となった、といってもよい。ミセス・フェットレイが盲目になったことと、おおやけにできないかつてのロマンスとのあいだになにか関係があるとすれば、それは「痛み」に「報い」る交換という関係である。

「大事なことよ、そうでしょ、痛みがあるということは？」――そういいのこしてミセス・アシュクロフトが息をひきとったことを、「もはや言葉にならなかった」は、示唆している。だとすれば、物語の最後の文はなにを意味するのか。

ミセス・フェットレイが「いまでもまだ昔の面影を残している形のよいその唇」に接吻したことは、彼女がミセス・アシュクロフトのたいせつなひと、ハリーそのひとに生成変化した可能性をもしめしているようにおもわれる。ミセス・フェットレイを介して、ハリーがミセス・アシュクロフトに、接吻したのである。

かくしてこの物語は、痛みの交換の論理にもとづいて、ミセス・アシュクロフトとミセス・フェットレイのあいだに、男女の性差をも横断した、奇妙な属性の変換をなしとげる。ミセス・フェットレイのおおやけにできぬ愛は、彼女の盲目という属性をひきうけたミセス・アシュクロフトを介して、成就し、完了する。他方、ミセス・フェットレイは、この愛の完成への返礼または「報い」として、みずからの女性としての性差を横断してハリーとなり、ミセス・アシュクロフトの愛をも、成就―完了させる。

この複雑な諸属性の相互変換において、二つの身体、二つの苦痛のあいだには、領土化―再領土化―脱領土化の過程が、同時進行している。ただし、きわめて静穏に、ほとんどそれと知覚されることなく。

あるいはむしろ、物語をよみおえたとき、このような脱属性化の運動と、諸属性の交換による奇跡は、じつのところ、さりげなくつつましやかに、日常において、いっけんありふれた日々のくらしのなかで、わたしたちにもしばしば起きているのではないか。そう、わたしたちはかんがえたくなる。

そのようにかんがえるとき、わたしたちは、いわゆる「日常」を構成し、それを再認という形式において継続させる知覚と慣習の体制からぬけだし、あらたな動作配列を構成する作業へと、すでに一歩をふみだしている。

## ためらう

ドゥルーズ／ガタリを援用しつつ、マルクス主義言語哲学を構想する、言語学者にして英文学者のジャン＝ジャック・ルセルクルは、『ドゥルーズと言語』で、キプリングの短編『『無線』』の読解をとおして、諸機械が構成する複数の回路の接触から言表の意味が生産されると主張する、ドゥルーズ／ガタリによる機械状言語論の様相を論じている。[3]

『『無線』』の舞台は、英国南岸のリゾートに位置する薬局である。語

り手は医師で、この薬局を経営する薬剤師の友人である。薬剤師には甥がおり、初期型マルコーニ無線をつかった通信実験を趣味にしている。ある日、語り手が甥のようすを見に薬局にやってくると、薬局には薬剤師のわかい弟子シェイナー氏がいた。氏は結核をわずらい、咳にくるしんでいる。みかねた語り手はあやしげな飲薬を調合し、シェイナー氏にのませる。

やがて赤毛のうつくしくわかい女性がシェイナー氏を訪問する。シェイナー氏は彼女と外出してからもどってくる。その直後、シェイナー氏は憑依状態におちいり、うわごとをしゃべりだす。

はじめはキーツの詩を引用しているようにおもわれたが、やがて語り手はきづく――シェイナー氏はキーツを引用しているのではない、苦通をともなう霊感（インスピレーション）をとおして、キーツそっくりの、あるいはキーツ以上の詩を、創作しているのだ、と。

シェイナー氏はたいへんくるしみながらキーツの詩の数節を校訂し、いくつか詩をつくりあげてから憑依状態をぬけだす。語り手の問いかけに、じぶんはキーツをよんだこともその名をきいたこともありません、と氏はこたえる。彼はキーツの詩を暗誦したのではない、まさしくつくりだしたのだ。

いっぽう、交信に失敗しつづけていた甥は、外海にでていた二隻の軍艦からの、不幸な無線をキャッチする。不幸というのは、二隻の軍艦は、発信はできても受信ができないからである。無線のメッセージは一方的にとどくだけである。甥がついにこのようなかたちでメッセージ受信に「成功」したとき、それが目的で薬局にきていたはずの語り手は、疲労をかんじたといって、帰路につく。

以上が「『無線』」のあらすじである。ここにも伝達（コミュニケーション）があらわれる。一方は詩的な伝達（憑依）、他方は技術的な伝達（無線）である。ルセルクはこの短編から刺激的な論点を多数、展開しているが、ここでは一点にしぼってみてみる。

二つの伝達は並行している。無線回路が受信用検波器（コヒーラー）の中に電磁場を誘導するのにたいし、詩的回路は、シェイナー氏の思考回路のなかに、詩的言語を誘導する。シェイナー氏をたずねてきた女性は、キーツの恋人ファニー・ブラウンにそっくりであり、彼女との恋愛関係がキーツの詩に霊感をあたえていたように、シェイナー氏の思考回路のなかでも、赤毛の女性のイメージが循環していたであろうことを、テキストはほのめかす。

そのほかにも無数の要因がいったいとなって、シェイナー氏の詩作（発話行為）にイメージや語をあたえる環境が構成されていることを、ルセルクはていねいに分析しているが、その詳細にはふれない。

ただ、それらの諸要素が、ドゥルーズ／ガタリのいう意味での「記号（シーニュ）」として[4]、シェイナー氏の思考を触発し、氏がキーツ（以上）の詩をつくりだすための動作配列を形成しているのはたしかである。

ここにあるのは、欲望の無数のながれと切断からなる世界である。それらのながれと切断は、言語的秩序の確立にむけて、コード化されてゆく。技術的伝達と詩的ないし霊的伝達とは、いずれも機械状の伝達過程をしめしており、その二通りの表現である。

キプリングはここでキーツを素材として、詩的・芸術的言語に限定したうえで、この過程をえがきだしている。だが人間の言語的交流（コミュニケーション）の全過程は、個的話者のあいだで成立するというよりはむしろ、ある経路（ネットワーク）を構成する機械のなかにある。だから人間は言語の使用者であるというよりはむしろ、作動過程にある機械の一部分である。こうドゥルーズ／ガ

タリならかんがえるだろう。してみると、『無線』というテキストは、あたかも内在性と超越性のあいだでためらっているようだとルセルクルはいう。

詩的なそれもふくめた伝達行為は、ながれのコード化において、機械状接続をとおして起きるという内在的な立場と、ヘルツ波と詩的霊感のいずれをも支配する、超自然的な未知の力の作用において起きるという超越的な立場。この二つの立場のあいだでの、躊躇である。

## おいる

いずれの立場をえらぶべきかと問うよりはむしろ、このためらいにこそ、キプリングのテキストにおける奇跡の誕生をかんがえる手がかりがあるのではないかと、わたしは問うてみたい。「園丁」や「祈願の御堂」と同様、『無線』においても、ひとつの文学機械の動作配列または誤作動により、交換または伝達というひめやかな〈奇跡〉の回路が成立していることが、確認されたからである。

この伝達における内在と超越のあいだのゆれは、精神分析を発明したフロイトにもみられる。

フロイトは、夢は無意識における欲望を充足させるとかんがえていた。[5] 夢をつくりだすはたらきそのものには、なんら作為や意図はない。だから計算や判断、思考などそこにはない。それはただ無意識の欲望を充足させるために、さまざまな記憶の断片を機械的に（写真機、映写機、録音機、情報圧縮転送装置などのように。ただしピンボケ、文字化け、雑音の混入などおかまいなしに）、写しとる。

そのいっぽうでフロイトは、夢は歪曲されなければ伝達されないともかんがえていた。なぜ夢は歪曲されるのか。検閲されるからである。検閲をくぐりぬけようとして、夢は欲望を直接的に表現するのではなく、さまざまなかたちで加工する。しかし夢をつくりだす作用には思考がはたらいていないとのべられていたのだから、検閲をごまかすといった意図で夢がさまざまな加工をおこなうとはかんがえられない。ここにフロイトのゆらぎがある。

だとするならば、夢は機械的に――なにもかんがえずに――諸要素を記録するという立場を内在的、夢は外からの圧力――検閲――にさらされているという立場を超越的と、それぞれかんがえることができる。

内在と超越のゆれは、伝達回路に偶発性を導入する。この偶発性によって、誤聴や誤作動が、奇跡が、生まれる。交流回路は機械的であるとどうじに霊（媒）的となり、あらたな聲やべつの眼が出現する。幻視や幻聴は、生きつづけること、老いることの肯定において、人間のさずかる、すばらしい恩寵である。

老い、衰えることは、ふたたびこどもになることである。諸感覚の衰退においてあらたな諸感覚が胎動し、あらたな未来をひらく予感、予言、記号、徴候をはなつ。わたしたちとは未来を産出する記憶保存所である。偶発性は人間の生におけるかけがえのない経験であり、奇跡である。

キプリングの短編は、このひめやかな奇跡を、わたしたちに与えつづける。かぎりなく。

## 注

（1）ラドヤード・キプリング、「園丁」、ホルヘ・ルイス・ボルヘス編、「バベルの図書館」叢書、第二七巻、土岐恒二・土岐知子訳、キプリング、『祈願の御堂』、所収、国書刊行会、一九九一年。

（2）キプリング、「祈願の御堂」、前掲、『祈願の御堂』、所収。

（3）Jean-Jacques Lecercle, “Interlude 3: A Reading of Kipling’s ‘Wireless’”, in *Deleuze and Language*, Editions Palgrave Macmillan, 2002, and Rudyard Kipling, “Wireless”, in *Traffics and discoveries*. キプリング、『『無線』』、新井礒乃訳、風間賢二編、『ヴィクトリア朝空想科学小説』、ちくま文庫、一九九四年、所収、を参照した。ただし、同版では「無線」に括弧がついていない。この括弧の意味についてもLecercleを参照。

（4）ドゥルーズ／ガタリのかんがえる記号は、シニフィアン（記号表現）とシニフィエ（記号内容）をくみあわせた、解読コードにもとづいてメッセージの送受信にもちいられる記号とは、少し異質である。かれらにとって、記号はあらかじめ明快に分節されたコミュニケーションのための手段という側面に強調点をおいて理解されるものであるよりはむしろ、わたしたちおのおのにおける欲望にふれる漠然としたなにか、わたしたちおのおのにおいて無意識を触発するなにかであるという意味で、精神分析理論における「徴候」にちかい。ただし、精神分析にとって「徴候」とは「病状」の徴候であるのに対し、ドゥルーズ／ガタリにおける「徴候」は、無意識がみずからの欲望を、創造することと相即的なしかたで表現するためのひとつのきっかけとして、とらえられる。こうした記号についてのかんがえかたを理解するにあたって、たとえばドゥルーズ／ガタリ、「いくつかの記号の体制について」、宇野邦一他訳、『千のプラトー』、河出書房新社、一九九四年、所収、などを参照。

（5）わたしのフロイト理解は、精神分析研究者である比嘉徹徳さんの議論からおおいに触発されている。もちろんここでの議論の責はすべて、松本に帰される。比嘉さんに感謝します。